

丸岡藩騒動記 作造の仇討 第三部

剣技（1）（P24~P31）

2月3日、作造は太田又八の屋敷を訪ねた。又八との出逢いからちょうど一ヶ月後である。約束の刻限、巳の正刻（午前10時）、屋敷の前に立った。又八は千石取りの家老だが、家屋は質素な造りである。ただ敷地は広く、外構え（塀）は頑丈に造られている。

重臣の屋敷は三の丸（内掘りの外周）に配備されている。外敵の攻撃に対して三の丸屋敷群は城郭防御拠点とされており、外構えの頑丈さは何にも増して求められていた。又八の屋敷は造りに戦国気風がうかがわれ、井戸はあるが泉水はない。広い空き地の塀際には厩^{うまや}があり、竹林がある。馬は戦には欠かせない、竹林からは箭が採れる、竹は燃料にも道具としても使える、鍛錬用の竹刀、いざとなれば竹槍にもなる。広い空間は合戦となれば一族郎党、人馬が集結する場所になる。

本来、武家屋敷は合戦を想定した造りなのである。美樹泉水の庭園は武家屋敷には不要であった。もっとも大坂の陣から七十年近く、太平の世となれば屋敷内に趣向を凝らした庭園を設ける重臣も少なくはなかった。

屋敷の門が開けられ、広場で屈強な武士が方肌を脱ぎ木刀を振っていた。全身から湯気が立っているから、かなり前から素振りに励んでいたのであろう。作造は男の鍛錬を眺めていた。この屋敷の下男であろうか、水桶と端切れ（手ぬぐい）を持ってきた。男は木刀を下男に渡し、端切れを水に浸し堅く絞ると、顔を、さらに肩、胸、両腕を拭いた。その頃合いを見張らかつて、彼は下男に声を掛けた。

「鳴鹿山鹿村の作造でございます。御家老様にお呼びいただき本日罷り越しました」と言うと、その武士は待っていたのであろう、

「作造殿か、御家老がお待ちかねでございます。某^{それがし}は中久喜儀左衛門と申す者、

御案内^{つかまつ} 仕 ろう」衣服を整え作造に近づいてきた。作造は頭を下げ、

「御屋敷に上がるのは恐れ多いことでございます。庭先でお話を伺います」と応えた。

風貌、物腰といい、言葉使いといい、根っからの百姓とは思えない。なるほど御家老が申されたように武家の出であろう。細身ながら筋肉質の軀は労働だけで鍛えられたものではない、武芸の鍛錬によるものと剣客である儀左衛門は見抜いた。

「御家老から座敷に案内^{あない}せよと御指示をいただいております。そのように遠慮されると拙者が困る」と言い、作造の遠慮を意に介せず屋敷の中に入った。作造は従うしかない。再び頭を下げ、後に続いた。

奥まった座敷の前になると儀左衛門は正座の姿勢を取った。作造も倣^{なら}った。

「作造殿を案内いたしました」と、言上すると、襖が開き、上座に太田又八、その横に恰幅の良い武士（本多刑部）が控え、襖を開けた青年、太田九八郎がいた。

「待っていたぞ。内^{なか}に入れ」又八の言葉に儀左衛門は座敷に入ったが、作造は廊下で平伏している。

「どうした作造、内に入れ」と又八が声を掛けると、

「もったいのうございます。御家老さまには困窮した領民を救っていただきお礼の申しようもございません。領民皆、御家老さまを崇めて手を合わせて感謝しております。その御家老さまと同じ畳に座ることなど恐れ多いことでございます」と言う。

施米は1月25日に行われた。2月、3月にも引き続き行われるということである。種粃調達の貸付利息は2割以下との定書が出されたことが庄屋を通して村々に伝えられた。この利息なら返済に苦しむことはない。又八は作造との約束（施米の実施、種粃の貸付利息の低減）を果たしたのである。

施米は本多織部から没収した二百俵、三国楼主からの供出申出の二百俵、丸岡商人からの供出申出の百俵の、合わせて五百俵が確保された。そのなかから三百俵を貧民への施米とし、百俵は困窮する下士に配分した。残り百俵を予備米とした。

これらは又八が同志と相談の上決めたのであるが、藩主の英断によるものとして周知させた。だがそれを信ずる者は、藩士も領民もいなかった。暗愚な重益公ができることではない、又八の才覚で行ったと察していた。それでも又八はお上の慈悲である、とした。

「お上が決めたことだ、儂に^{かしこ}畏まる必要はない。寒い、内に入って閉めろ」と言う。作造、止むを得ず内に入るが平伏したままである。

「作造、面を上げよ。こちらは家老の本多刑部殿だ、挨拶を申せ」

「鳴鹿山鹿村の百姓、作造でございます」と面を上げたが直ぐ伏せた。

「本多刑部だ。なるほど良い面構えをしている」

「そちを案内したのが中久喜儀左衛門、藩内一の使い手だ」

「あれは太田九八郎、^{せがれ}倅だ」儀左衛門、九八郎が頷く。作造、その度に平伏す。

「その方、生まれながらの百姓か」又八が訊いた。

「左様でございます」「その方の父はどうか」「父も百姓でございます」

「ならば祖父も百姓か」「・・・百姓でございます」

「重ねて尋ねるが、その先はどうか」「武士でございました」

（解せぬ。武家を捨てて三代と云う、そのような百姓は領内にもおる。だが彼等と作造はあきらかに異なる。此の者は身なりこそ百姓だが武士の風格を漂わせている。否、武士が百姓の身なりをしているとしか思えない。何故だ）
又八も刑部、儀左衛門も九八郎もそう思った。

「曾祖父は何処^{いずこ}の家中だったのか」と又八が訊くと、意外な答えが返ってきた。

「本多成重^{なりしげ}さまにお仕えしておりました」一瞬、一同息を呑んだ。

成重は本多丸岡藩の藩祖である。

北ノ庄藩六十八万石、松平忠直（結城秀康嫡男）が乱行を理由に配流処分となり（1623年）、九歳の嫡男・光長が後を継いだ。だが若年という理由で越後高田藩との国替えがおこなわれた。光長は高田藩二十六万石に移封され、高田藩から忠昌（秀康次男）が越前に入国した。その際北ノ庄藩は分割された五十万石となった。大野五万石、勝山三万石、木本二万五千石が三人の秀康遺児（直政、直基、直良）に与えられ其々が立藩したのである。さらに敦賀郡が召し上げられ幕府直轄領となり、坂北四万六千三百石が北ノ庄藩丸岡城主であった本

多成重に与えられ本多丸岡藩が誕生したのである。

その成重公に仕えていたと云う。藩士にとって藩祖は神のような存在である。

「御尊名を^{うけたまわ}承ろう」刑部が言葉を改め尋ねた。

「^{はせべただよし}長谷部忠良と申しました」作造の返答に一同再び息を呑んだ。

長谷部忠良は伝説の武人である。その武勇、忠義は丸岡藩の語草となっている。

忠良は天正6年（1578年）生まれである。忠良の父は本多重次（通称、鬼作左衛門。成重の父）の郎党で、忠良自身は成重の近習であった。重次は忠良に武芸の才を認め、日々厳しい鍛錬を課し、とりわけ戦場での剣技の奥義を伝授した。

忠良が18歳のとき重次は死去したが、その後も鍛錬を重ね家中一の猛者と称されるようになった。鬼作左衛門を彷彿させる剣技の凄まじさは後年、大坂夏の陣で示された（後述）。忠良は後に丸岡藩を離れ府中本多家（本多富正）に仕えた。

結城秀康が北ノ庄六十八万石の太守となったとき、本多富正が徳川家から付家老として遣わされ府中城主となった。秀康死去後、北ノ庄藩で本多富正と反富正派が対立し、お家騒動が勃発した（久世騒動。1612年）。久世騒動は幕府の裁定により富正が勝利し敵対する勢力を追放し筆頭家臣としての地位を不動なものとした。反富正派首領の丸岡城主・今村盛次も追放され、その後任として富正の推挙により成重が付家老として丸岡に入った。

富正の父、本多重富は重次の兄で、富正と成重は従兄弟、しかも同年（1572年生まれ）である。北ノ庄藩は本多正富、成重の二人の徳川家からの付家老によって支えられていた。

正富は長年、子宝に恵まれず、成重の子、志摩を養継子に迎えた。長谷部忠良は自ら申し出て志摩の守役（後見）として府中本多家に仕えたのであった。

慶長19年11月大坂冬の陣の火蓋が切られ、北ノ庄藩は本多富正、成重を両

翼として出陣した。だが若き藩主、松平忠直（19歳）は功を焦り真田信繁（幸^{のぶしげ}村）勢に散々に討ち破られ、大御所家康より未熟さを厳しく叱責された。忠直にとって屈辱の初陣であった。富正、成重にとっても不名誉な戦であった。

翌年の夏の陣には藩主以下、すべての武将は討死覚悟の不退転の決意で臨んだ。長谷部忠良は本多富正勢の先鋒となり、真田方の侍大将である大谷吉治（大^{よしはる}谷吉継の遺児）を一騎討ちの末、討ち取るなど獅子奮迅の働きをみせた。敵の侍大将を討ち取った勢いで越前勢は真田勢を撃破、信繁を討ち取った。夏の陣での越前勢の活躍は目を見張るものがあり、挙げた首級三千七百であったと伝えられている。松平忠直、本多富正は家康より格別の労いの言葉を賜った。冬の陣での屈辱を晴らしたのである。家中では長谷部忠良の武勇が称賛された。忠良の絶頂期であった。

だが志摩、忠良に暗雲が漂い始めた。大阪冬の陣の2か月前、富正の新たな側室に男子が誕生した。富正43歳にして初めて授かった子で、千菊と命名された、後の昌^{まさなが}長である。嫡男誕生により養嗣子として迎えられた志摩の立場は微妙になった。富正は律儀な性格であったから成重との約束を反故にするような男ではなかった。だが周囲の志摩への態度は明らかに変化した。冷やかになったのである。

千菊が成長するに従い志摩は心の平静を保てなくなっていった。千菊の誕生から9年後の元和9年（1623年）、志摩は府中を出奔し江戸に向かった。忠良はその後を追った。誰もが志摩を連れ戻すために江戸へ向かったと思った。

彼は志摩を見つけたが、府中にも丸岡にも連れ戻そうとはしなかった。自らも主家を捨て江戸で暮らしながら志摩の世話をしつづけた。それが忠良の忠義であった。富正は忠良の心情を察して許した。その方が府中本多家には好都合という思惑もあったであろう。

志摩と忠良が江戸で暮らしてから3年後の寛永3年（1626年）志摩が病没した。忠良は弔いを済ませ、府中本多家と丸岡藩の江戸屋敷に届け出た後、自刃し志摩の後を追った、享年49歳であった。

父が自刃したことを知らされた嫡男の良治よしはるは藩主に家禄の返上を申し出た。父が府中本多家に出仕した後も良治は母とともに丸岡に残って成重に仕えていたのである。誰もが志摩を死なせた父の責任をとっての行動であろうと思った。成重は「その儀には及ばず」と慰留した。

不遇の身に落とされた我が子、志摩を最後まで支え、殉死した忠良に感謝こそすれ、咎める気はなかった。さらに百戦錬磨の武勇を称えられた父、重次が直々に伝授した奥義は忠良から良治に伝授されていた。父が残した奥義を藩に残したいとの思いもあった。

藩主の慰留にもかかわらず、良治は母と共に城下を去った。そのとき彼は 23 歳だったという。そこまでは又八も、刑部も知っているが、その後の良治を知る者はいない。今、目の前に長谷部良治の孫がいる。

「成重公は忠良殿の我が子への忠義に感謝されていた。家中の者も武士の鑑と称えていた。良治殿は父上を誇りに思っても恥じることは何一つなかった。だが藩を去られた、何ゆえであろうか」又八が尋ねた。

「父が祖父の言葉を語ったことがありました。『志摩さまが出奔された時、父（忠良）は志摩さまに殉ずることを決意した。父にとって志摩さまは主君であり、我が子でもあった。忠義を貫き、情愛を注ぐ相手は志摩さま唯一人、妻も子（良治）も眼中になかった。妻には冷酷な夫、子には厳格な父に過ぎず、温かさは微塵も感じられなかった。死して忠義を称えられた父は本望かも知れぬが、母や私から見れば自分勝手な男であった。』

その父が忠義と武勇を称賛されても虐げられた者には素直には喜べず、むしろ反感を募らせるだけだった。藩内で忠臣、長谷部忠良という虚像がつくられ、その虚像にまで縛られて生きることに耐えられなかった』良治という人は長谷部忠良を憎み、死して虚像と化した父と決別するために藩を去ったのであろうと、父は申ししておりました」

その後の良治について作造は語った。それによれば良治は仕官先を求めて各地を放浪した。剣の技量は余人に劣ることはないが、巷には仕官を望む浪人が

溢れていた。伝手もない世間知らずの無垢な若者が彼等と伍していけるほど世のなか甘くはなかった。そのうち仕官活動とは名ばかり、辛うじて人足仕事で生活の糧を得ていた。時には腕を見込まれ乱暴な仕事も引き受けることもあった。2年、3年と先の見えぬ暮らしに、やりきれぬ思いが鬱積し、武士の誇りさえ失いかけていた。

実家に戻っていた母が病床に伏せたとの便りが届いた。良治は3年ぶりに帰郷した。母方の実家は庄屋で、しばらく看病をかねて百姓仕事を手伝っているうちに、この仕事が己に向いていることに気づいた。自然と向き合い、大地に鍬を入れて汗を流し、作物を育てる生き方が、寡黙な若者の心を惹きつけたのである。

良治は武士を捨てることを母に告げた。母も望んでいたから喜びは尋常ではなかった。息子の先々の心配がなくなると病は癒えた。良治の決心を知ると実家が田畑を分けてくれた。母子で百姓を始め、翌年、母方の遠縁にあたる郷士の娘を娶り、二男一女を得た。彼は百姓であることに満足し、穏やかな生活をおくり、寛文2年(1663年)60歳で没した。

これが良治のその後であった。

良治の長男が作治で、彼も百姓を継いだ。作治も郷士の娘、タエを娶り二男を得た。長男が作造である。作治は4年前(1678年)、タエは昨年(1681年)没した。

「良治殿が百姓になられたとは、しかも我が領内で・・・」刑部が溜息をついた。「忠良殿は武士の鑑であられた。だが、良治殿の気持ちもわかる気がする」又八は感に堪えぬという面持ちであった。

儀左衛門の態度が落ち着かない。作造に尋ねようとするが、切り出せない。確かめたいのだが、この場で尋ねるのは場違いかとの思いが躊躇させていた。儀左衛門の心中を見透かしたように、又八が水を向けた。「尋ねたいことがあるのであろう。何なりと尋ねるがよい」

意を決した儀左衛門はようやく口を開いた。

「作造殿、良治殿が武士を捨てられたとき、剣も捨てられたか。重次公から伝授された奥義は良治殿の代で絶えられたか」

「重次公より受け継いだ剣技は守り続けております。結局、祖父は長谷部忠良から逃れられなかった。百姓でありながら剣が捨てられず、同じように我が身が受けた修練を我が子に強いたのです。それは父も同じでした」

刑部、儀左衛門、九八郎は一斉に又八に目を向けた。彼に言わせようとしているのだ。又八は苦笑した。

「作造、折り入って頼みがある。この者たちが長谷部に伝わる技、重次公から伝授された奥義を拝見したいと言うのだ。儂もそうなのだが・・・、是非とも頼む」

「もはや幻の技、見た者は誰もおりませぬ。何卒披露していただけぬか、伏してお願い申す」と儀左衛門が平伏した。

作造が又八に目を向けると、彼は微かに頷いた。

「わかりました。儀左衛門さま、お相手していただけますか」と彼が言うと、儀左衛門、目を輝かし、

「是非とも」と応じた。